

## 「まちづくり」と古都の景観保存



同じ古都であっても、日本とタイとはだいぶ事情が違う。一概に単純な比較をすることはできない。当然、それぞれの国の歴史、文化、社会、風土などに応じた「古都のすがた」があってよいはずだ。ただ町並み保存や景観保全という観点からすれば、奈良、京都、鎌倉などでの日本サイドの経験や事例が今後のチェンマイの都市開発の際に参考になることも確かだろう。

2003年より民間レベルでの接触として、社団法人・奈良まちづくりセンターとチェンマイ都市開発研究財団 (UDIF) との交流がスタートした。さらに2006年3月末には、チェンマイ県「土木・都市計画事務所」に4名のJICAシニアボランティアが派遣され、チェンマイ市近郊の景観データベースの収集をはじめとする現地研究が進められている。

以下はその景観保存プロジェクトチームのひとりであり、奈良まちづくりセンター 顧問の上嶋晴久氏のお話をまとめたものである。

(聞き手：高橋 敏)

### 景観保存のシステムが必要。そのためのムーブメントを作っていく。

「今回の赴任の主な目的は、景観保存のムーブメントをチェンマイで盛り上げることです。例えば、これまでの都市総合計画法などを見ても、単に土地利用の観点からの規制とか、事業整備のなかでの予算ベースの話だけで、景観がどうのこうのという発想はほとんど出てこない。おそらくタイ人も景観の重要性についてある程度は解っているんでしょうが、それがちゃんとしたシステムになっていない。部分的な事業では景観保存が考慮されることはあっても、その事業だけで終わってしまう。あるいは担当者が代わると、忘れられてしまうとか。長期的な計画のなかでの視点が欠けているんですね。

だから、われわれの役割は、まずタイ人の皆さんに景観保存の意識を持ってもらうように仕向けるというか、大きな流れのなかでそうしたベクトル、共同イメージを作り出すお手伝いをしましょうということなんです。単なる研究ではなく行政関係者、学者、市民などいろいろな人たちを幅広く巻き込んで、全体的なムーブメントを作っていけたらと思っています」

### 行政頼みではだめ。住民参加による「まちづくり」の意識を高めていく。

「チェンマイ市内で具体的に興味深い場所のひとつとして、ワロロット市場周辺の古い建物が並んでいるエリアがあります。それらの木造建造物はそこで暮らす中華系の人たちのアイデンティティをしっかりと継承しているように思えま

す。あの一帯はまちの風格さえ感じられるけれど、それを残していくための現実的なシステムがないのが問題ですね。公費を投入するとか、企業からの寄付を募るとか……。例えば、基金を作って運用することによって、いずれは壊れてしまうような古い建物を修理していく。そんな提案をこれからしていきたいわけです。

そのためには、大きな方向性を踏まえた住民参加の意識を高めることが必要になってきます。行政に任せきりではなく、かといって自分たちだけでやるのでもない。行政と住民が歩み寄りながら、一緒にまちづくりをしていく。そこが大切なポイントだと思いますね。

奈良の橿原市今井町の場合、昔からまちのルールや規範があって、民意のなかで自然にきまりができてきた歴史的経過があります。だから、現実的なスタンスの中でひとつひとつ積み上げていく、住民主体のまちづくりが可能になったわけです。チェンマイだと、ワット・ゲート地区にそれに近い動きが見られるようですね」

### 景観保存のためのデータベースが不可欠。サイト活用で一般公開していく。

「今後、景観保存の意識を高めていくためには、住民、行政、学者がそれぞれ同じレベルで共有できる基礎的なデータの蓄積が不可欠です。そこで、現在、チェンマイ大学建築学科のナウィット教授とその10人ほどの学生さんたちと協力してデータベースの作成を進めています。これまで50箇所ぐらいの実地調査を終えたところですが、最終的には300箇所程度のデータを集めることを目標にしています。

ゆくゆくはこれをホームページなどで広く発表するようにしたいですね。チェンマイ大学が商工会議所のサイトの一部を借りることになる

かもしれませんが、少なくともタイ語と英語で情報を公開していくつもりです。都市計画、景観保存だけでなく、環境保全、観光事業、景観教育など、さまざまな分野で利用できるようなデータベースを目指しています。このようなチェンマイでのテストケースがやがて全国レベルの景観保全の指針作りにつながってほしいと思っています」

### チェンマイのお気に入りの景観。家と生活の中に息づくアイデンティティ……

「チョラパターン運河沿いからのドーイ・ステープの眺めはなかなかいいですね。京都の景観条例のように、こうした風景を眺める視点を何箇所か決めたらいいと思います。

あとチェンマイ近郊地区の話をするれば、ハートン、サーラピーなどの街並み自体にはこれといった景観の特徴はありませんが、郊外の家に立ち寄ったときにタイ人のアイデンティティを見る思いがしました。家の建て方もそうですが、いきなり家の中を覗いてもきちんと整理されているし、家を実にきれいに使っている。庭先にはたいていハーブが植えてあったり……。生活全体の中にそこに住んでいる人たちのアイデンティティが滲み出ているんですね。

個人の家としては、ナイトバザール裏の中国系の方が住んでいる建物 (下段記事参照) がとても興味深い。開発で取り壊されないように、お役所にも働きかけたところなんです……。将来、住む人がいなくなったとき、あの建物を利用してチェンマイの「まちづくりセンター」を設置して、建築家協会、都市開発研究財団、JICAなど、いろいろな団体が入居したら、有意義な交流の場になるかもしれませんよ」